

上条

報告

第54号
平成25年11月

甲州市教育委員会
☎32-5097

けんぽんちやくしよくだるます

国宝・絹本着色達磨図

十月二十五日から二十七日まで、甲州市国文祭実行委員会が主催する事業「武田家ゆかりの文化財めぐり」が開催され、県内外の多くの方が市内の貴重な文化財の観覧に訪れました。

今回の大きな目玉として、市内に所在する国宝三件の一般公開がありました。

国宝は国内で一〇八九件の指定があり、うち山梨県内には五件所在しています。内容は、大善寺本堂（建造物）、清白寺仏殿（建造物）、絹本着色達磨図（絵画）、絹本着色夏景山水図（絵画）、小桜葎威鎧 兜、大袖付（工芸品）で、甲州市には大善寺本堂・達磨図・鎧（楯無鎧）の三件が保存されています。これに清白寺仏殿まで入れると、実に五件中四件が東山梨地域に集まっていることが分ります。

事業期間中、向嶽寺で達磨図の展示等に携わっていました。その間二度の講演会があり、達磨図についての最新の研究成果を知ることができました。

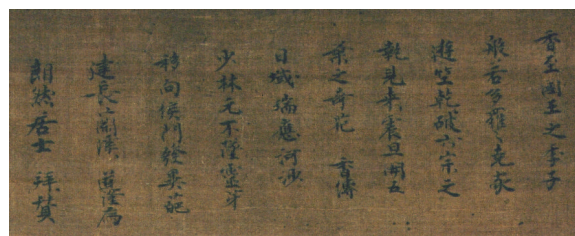
達磨図は十一月三日から十一日まで、山梨県立博物館でも公開されます。今号では、講演会で得た知見をご紹介しますので、県立博物館での観覧の際の一助となれば幸いです。

絹本着色達磨図について

向嶽寺の達磨図は、昭和二十八年十一月十四日に国宝指定されました。解説としては次のとおりです。

この達磨図はわが国に数多い達磨図の中でも特に有名で、かつ禅宗美術史上重要な位置を占めている。かつて宋画とみられたこともあるが、宋画特有の鋭さはなく、全体がゆったりと柔和に表現されており、南宋画の影響を強く受けたわが国の画人が心血を注いで描いたもので、鎌倉建長寺蔵の「蘭溪道隆像」とともに、わが国における南宋画様式の早期受容の一端を窺いが得る貴重な文化財である。達磨像の肉身はやや黄色味を帯び、朱色の頭巾と法衣の用筆と相まって、生き生きとした面貌をとらえ、四方をにらむ両眸は俗に「八方にらみの達磨」といわれている。上方の賛は建長寺開山であり、また甲府市東光寺・韭崎市永岳寺等の開山でもある大覚禅師蘭溪道隆が朗然居士とい

う人物のためにつけたもので次のように読める。



香至国王之季子
般若多羅之克家
遊竺乾破六宗之
執見来震旦開五
葉之奇花 香伝
日域瑞応河沙
少林元不墜靈芽
移向侯門発異葩
建長蘭溪道隆為
朗然居士 拝賛

（読み下し・現代語訳は裏ページ）

為書の主、朗然居士については確実にわからない。その邸宅を侯門といっているので鎌倉幕府の執権とみるのが至当であろう。かつては北条時頼説も唱えられたが、時頼の子時宗がかねて道隆に散学していたため、朗然居士は時宗の居士号とみて差し支えないであろう。



国宝・絹本着色達磨図（大本山向嶽寺蔵）
赤い衣をまとっていることから「朱達磨」ともいわれています。禅宗の始祖として、日本の仏教にも多大な影響を及ぼしました。達磨というと、手足のないダルマを思い出しますが、それは9年間の座禅で手足がとけてしまった姿を現しています。上方に見える書き物が「賛文」です。

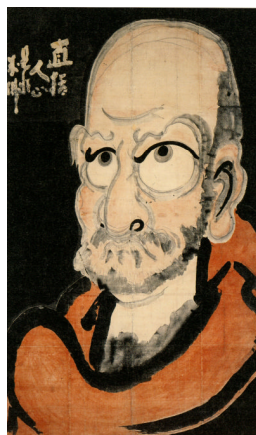
山梨県立博物館にて、
11月3日から11月11日まで、
もう一つの国宝絵画「夏景山水図」と
ともに展示されます。必見！

達磨禪師について

菩提達磨といい、生没年不詳です。インドの香至国王の第三子として誕生し、その後中国へ渡り禪宗を広めたため、禪宗の初祖として崇拜されており、謎に満ちた半生は多くの逸話を残しています。

中国では芦の葉に乗って揚子江を渡り、また、少林寺では岩壁に向かつて九年間座禅をしたといわれています。達磨図にはこの逸話に基づいた画像も多く、芦の葉に乗って揚子江を渡る姿は「蘆葉達磨図」として、九年間の座禅の様子は「面壁達磨図」として、いずれも恵林寺にあります。このほか、達磨の没後片方の履物を手にしてインドへ帰る達磨の姿をみたというものがあり、棺を開けたところ片方の履物のみであったという逸話をもとにした「隻履達磨図」も知られています。

江戸中期の禅僧である白隠慧鶴は、好んで達磨図を描き、「白隠の達磨」として特に有名です。



蘭溪道隆について

道隆は宋の蜀の蘭溪の人で、寛元四年（一二四六）三十三才のときに来朝、建長四年（一二六五）北条時頼に請ぜられ鎌倉の建長寺を開山しました。弘安元年（一二七八）に六十六才で亡くなる間、二度甲斐に来ており、甲府の東光寺などを開山しています。

亡くなって後、大覚禪師と勅諡されましたが、これはわが国初の禪師号です。

画の特質について

達磨図の本紙（描かれている画面）の大きさは、縦一二三・〇センチ、幅六一・二センチを測り、表具まで入れると長さは二メートルを越えます。画材は絹で、一枚の絹を用いています。

この絹について、拡大して観察したところ、一センチ四方に縦横とも三四〜三六本の糸で隙間なく織られていることがわかりました。当時の日本の技術では、これほど緻密に絹を織ることはできず、また、幅も六〇センチを越えており、日本の絹なら二〜三枚を縦につなげなければならぬものを一枚で織り上げているため、中国の高い技術で織られた絹を輸入して用いているものと思われます。

画は、伸びやかな衣服の表現とは逆に、面容、特に口ひげ、あごひげなどは、一本一本を細かく丁寧に描いており、目元にはわずかに朱を入れて表現に陰影をつけるなど、先の解説で記した「わが国の画人」が描いたとは思えない技術がみられます。

通常賛文を書いてもらうためには、もらい手が書き手に絵画を持参するといえます。達磨図の場合、もらい手は朗然居士、書き手は蘭溪道隆です。朗然居士という人物は、中国産の絹を輸入して、第一級の絵師に達磨図を描かせることができる人物であることがわかります。

蘭溪道隆が建長寺で賛を書いたとすれば、蘭溪道隆に参禅し、かつ権力の中核にいた人物として、北条時宗が挙げられます。時宗は文永五年（一二六八）に第八代執権となりましたので、朗然居士とは北条時宗を指すという考え方が一般的です。

賛文について

《読み下し》

香至国王の季子、般若多羅の克家、

竺乾に遊びて六宗の執見を破り、

震旦に來たりて五葉の奇花を開く。

香、日域に伝わり、瑞、河沙に応ず。

少林、元より靈芽を鑿はず、

侯門に移向りて異葩を發く。

建長の蘭溪道隆、

朗然居士の為に拝賛す。

《現代語訳》

香至国王の末子に生まれ、般若多羅の法をよく受け継いだ達磨は、インドでは六つの異宗の誤りを打ち破り、中国へやって来て、その法門は美しい五弁の花を咲かせた。

その香りは日本にも伝わって、瑞兆は数えきれないほどである。

少林山の面壁九年の歳月は、靈妙な芽を腐らせることはなく、今、高貴なお方のもとに、珍しく美しい花を咲かせようとしている。

建長寺の蘭溪道隆が朗然居士（時宗か）のために賛を書す。